

—短報—

古代ローマで栽培されたリンゴとセイヨウナシの品種

境 博成・君島利治

東京農業大学・生物産業学部・食香粧化学科

〒099-2493 北海道網走市八坂196

Note : Form-names of Apple and Pear cultivated in Ancient Rome

Hiroshige SAKAI and Toshiharu KIMIJIMA

Department of Food and Cosmetic Chemistry, Faculty of Bioindustry

Tokyo University of Agriculture

196 Yasaka, Abasiri-shi, Hokkaido, 099-2493, Japan

On the form-names of apple and pear cultivated in ancient Rome, 21 kinds of apple and 38 of pear are found in *Naturalis Historia* (Natural History) written by Plinius (Pliny, 23-79). Some of these trees were brought into Rome through Greek after Alexander's expedition or imported from overseas countries under Roman control.

The word of *malum* (pl. *mala*), meaning apple in Latin was not only the word to given to an apple but also to some pome-fruits such as *mala Assyria* (plum), *mala Persica* (peach) and *mala Medica* (citron). Since the age of Plinius, 'malum' had come to mean only an apple gradually.

Manzana, apple in Spanish, is named after *mala Matiana*, which was a kind of apple in ancient Rome and admired variety in Hispania governed by Rome.

古代ローマの果樹栽培の状況を教えてくれる史料は、カトー (Cato, 前 234-149) やヴァロ (Varro, 前 116-27)、コルメラ (Columella, 4-70) などが残した農書である。彼らが生きた時代はローマ帝国が最も繁栄した時代で、地中海を取り囲む全域がローマの支配にある属州であった。政治家や退役軍人はそれらの地域に土地を求め、日雇耕作人や奴隷労働に依存した大農場を経営した¹⁾。

カトーの『農業について』(De Re Rustica)²⁾ はヨーロッパ最古の農書である。ヴァロも同名の著作を残し、コルメラは『農業論』(Res Rustica)³⁾ を世に出した。これらの農書は農場経営の全般について、例えば土地の選定、耕作人の数、播種時期、樹木の繁殖、野菜の育成、家畜の飼育、養蜂など多岐にわたって解説したもので、当時の農業の実情を知る貴重な史料であるが、邦訳は出版されていない。

個々の栽培果樹の品種について、カトーとヴァロの著作では特に注意が払われていないがコルメラの著作ではいくつかの名称が見える。本稿では彼らが著述したラテン

語原典 (ロエブ版) に見える種々のリンゴとセイヨウナシについて、古代ローマの人々が呼称したそれらの品種名について紹介したい。

彼らが生きた時代を通して小麦の栽培は次第に属州に移り、イタリア半島の農園では主にブドウ、オリーブ、野菜や果物などが栽培されるようになった。カトーは農園に整備すべき圃場は、まずはブドウ畑で次いでオリーブ園、そして牛を育てる草地と野菜畑であると説いている²⁾。市場で売られたリンゴ、ナシ、プラム、サクランボ、イチジク、マルメロなどの果物⁴⁾ はそれらの圃場の一隅で栽培されたものである。

カトーは自著に 'mala struttia' と 'mala mustia' の2種類のリンゴ名を記載した。ラテン語の *mala* はリンゴ *malum* の複数形である。Malum はリンゴの他にアンズ、レモン、マルメロ、ザクロなど円形の果実を表す語でもあり、古代ローマの人々はモモを *mala Persica* (ペルシャのリンゴ)、シトロンを *mala Medica* (メデアのリンゴ)

あるいはプラムを mala Assyria (アッシリアのリンゴ) などと呼んでいた^{5,6,7)}。カトーが記した 'mala strugia' (ストルテアのリンゴ) はヴァロの著作²⁾では 'mala strutha' とあり、この果物は古代ギリシャで 'ストルーティオン' と呼ばれていたマルメロの一種である⁸⁾。

もう一つの名称 mala mustia について、ヴァロは '以前に mustia (果汁が多い) と呼ばれた果実は、今は melimela (蜂蜜のリンゴ) と呼ばれている' と著述²⁾していることから、mala mustia は 'melimela' と呼ばれたリンゴの品種であることが判る。

カトーの『農業について』²⁾にはリンゴの他にセイヨウナシ (5種)、ブドウ (5種)、オリーブ (2種) などのいくつかの名称が見えるが、これらは古代ローマで知られていた品種のごく一部にすぎない。コルメラの『農業論』(Res Rustica)³⁾では、それらの名称はそれぞれ8種、17種、30種、9種に増えているが、彼の著作には市場で知られている品種名を意識的に記載した意図が感じられる。

コルメラが生きた時代はカトーが没して約100年後の時代であった。次第に 'mala' はほぼリンゴを限定する語として世間に定着するようになる。彼が記載したリンゴとセイヨウナシの品種 (ラテン語) とその名称の由来を表1に示した。

表1. コルメラの『農業論』に見えるリンゴとセイヨウナシの品種*

リンゴの品種 (8種)
人名に由来: Cestina, Matiana, Scaudiana
地名に由来: Amerina, Pelusiana, Syrica,
果実に由来: orbiculata, melimela ^a
セイヨウナシの品種 (17種)
人名に由来: Aniciana, Crustumina, Donabelliana,
Favoniana, Naeviana, Turranaiana
地名に由来: Lateritana, Signina, Talentina
果実に由来: hordeacea, mulsa, praecocia, purpurea,
regia, superba, venerea, volaema ^b

* : ラテン語名、語頭が大文字は固有名詞

a : 円形の、甘い

b : 大麦収穫時に熟す、甘い、早熟の、紫の、王様の、見事な、ビーナスの、長官の

コルメラと同じ時代を生きたプリニウス (Prinius, 23-79) は『博物誌』(Naturaris Historia) を著述した^{5,6,7)}。天文、地理から動物や植物を含め、建築、宝石なども網羅した全37巻に渡るこの著作は、それまでに上梓された約1,000の著作を参照して編纂された世界最古の百科全書である。

その Liber XIV-XV (Book14-15) に果樹の記載があり、リンゴとセイヨウナシについて様々な品種が記載されている⁷⁾。これらは様々な時代の、種々の著作から収集したもので同種異名による重複は避けられないが、それぞれの品種 (ラテン語) とその名称の由来を表2.と表3.に示した。

表1-3に記された人名や地名の多くは由来が不詳であるが、リンゴの一種 Matiana は皇帝アウグストゥスの友人、マティウス Matius に由来する名称である⁵⁾。属州ヒスパニアでは mala Mattiana と呼ばれて評判が高まり、やがてリンゴを意味するスペイン語、マンサーナ Manzana の語源となった⁹⁾。

古代ローマで栽培されたサクランボやシトロンは前330年代のアレクサンドロスの遠征に伴ってトルコやインドからギリシャに送られ、さらにローマに渡ったものである³⁾。カトーの時代には接木や挿木、取木などの繁殖法が現在と変わらぬまでに進展していた¹⁰⁾。属州の高

表2. プリニウスの『博物誌』に見えるリンゴの品種*

由 来	名 称
人 名	: Cestiana, Matiana, Malliana, Scaudiana, Sceptiana
地 名	: Amerina, Graecula, Petisia, Quiriniana, Scantiana, Syrica
香・味	: melimela (mustea), farina ^a
色・形	: cohaerentia, melapia, melofoliis, orbiculata, orthmastia, pannucea, pulmonea (spadonia) ^b

* : ラテン語名、語頭が大文字は固有名詞

a : 蜂蜜のリンゴ、粉のような

b : 双子の、ナシのような、実から葉が出る、円形の乳首のような、ポロのようになる、膨らんだ、去勢した (種子がない)

表3. プリニウスの『博物誌』に見えるセイヨウナシの品種*

由来	名称
人名	Aniciana, Coriolana, Decimiana, Dolabelliana, Favoniana, Liceriana, Pomponiana, Pseudo-decimianum, Seviriana, Tiberiana, Turraniiana
地名	Alexandrina, Amerina, Crustumia, Falerna, Lateriana, Numantina, Numidiana, Picentina, Signina, Tarentina
香・味	acidula, cucurbitina, laurea, myrapiia, nardina ^a
色・形	ampullacea, onychina, purpurea, Veneris ^b
その他	barbaricis, Bruttia, hordearia, patriciis, regiis, superbiae, vocimis, volema (sementiva, mustea) ^c

* : ラテン語名、語頭が大文字は固有名詞

a : 酸味のある、ヒョウタン味の、月桂樹の香りがする、芳香がある、ナルデの香りがする、

b : ビン形の、縞メノウ色の、紫の、輝いた

c : 野蛮な、ブルティウム民族の、大麦収穫時に実る、貴族の、王様の、誇らしい、不詳、長官の (種まきの頃に実る、果汁が多い)

官や軍人あるいは貿易商人が海外から持ち込んだ珍奇な果樹は、それに因む人名や地名、あるいは特徴が付されて、またたく間にイタリア半島の農園に広がったと思われる。

最初から最後まで、を意味する古代ローマの成句に 'ab ovo usque ad mala' (卵からリンゴまで) とあるように人々の食卓にはリンゴなど様々な果実が並んだ。農園で収穫した果実は近くの市場に卸され、一部は果実小売商 (ポマリウス pomarius) に渡された。ローマ市民は大競技場の周辺に集まっていた果物屋や行商人からお気に入りを買った¹¹⁾。



図1. リンゴ行商人の浮き彫り

パリ近郊の国立考古学博物館に古代ローマの浮き彫り石版が保存されている (図1.)。リンゴ籠を肩に掛けた行商人が '林檎だよ (mala)、奥さん、奥さん (mulieris, mulieris, meae)' と呼びかけているレリーフで、果物は贈り物としても好まれたという¹¹⁾。

文献

1. 長谷川岳男・樋脇博敏: 古代ローマを知る事典、東京堂出版、東京 (2004)
2. Hooper, W.・Ash, H. Trans.: Cato & Varro De Re Rustica, Loeb Classical Library, Harvard Univ. Press, Cambridge, MA (1967)
3. Forster, E.・Heffener, E. Trans.: Lusius Junius Moderatus Columella on Agriculture Vol. II・Loeb Classical Library, Harvard Univ. Press, Cambridge, MA (1941)
4. ピエール グリマル・北野徹訳: 古代ローマの日常生活、白水社、東京 (2005)
5. 大槻真一郎編: プリニウス博物誌・植物篇、八坂書房、東京 (1994)
6. Rackham, H. Trans.: Pliny Natural History Vol. IV Books 12-16・Loeb Classical Library, Harvard Univ. Press, Cambridge, MA (1945)
7. LacusCurtius・Pliny the Elder's Natural History (in Latin), <http://penelope.uchicago.edu/Thayer/E/Rome/Texts/Pliny-the-Elder/home.html>
8. 小川洋子訳: オプラストス植物誌1・西洋古典叢書、京都大学学術出版会、京都 (2008)
9. www.merriam-webster.com/dictionary/manzana
10. 境博成・君島利治: 古代ギリシャ、ローマおよび中国における果樹の挿木、取木および接木の実施とそれらの発祥に関する考察、ESD・環境教育研究、Vol. 19 (1); 9-11 (2017)
11. カール ヴェーバー・小竹澄栄訳: 古代ローマ生活事典、みすず書房、東京 (2013)

